

---

# 変態の日常的生活

荒崎 薫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変態の日常的生活

### 【Zコード】

Z9930Z

### 【作者名】

荒崎 薫

### 【あらすじ】

靈好きで口リコンである俺、志多野。動物好きでファザコンである境。ニコーハーフである前澤。腐女子で口リ、ショタコンである阿部。植物好きで性別不明である田仲。こんな個性豊かな俺たち五人は高校の入学式前日に超豪邸へと引越したんだ！ これで中学の時判らなかつた田仲の性別を知ることができるので俺の理性を狂わせる。しかし、男かもしれないという考え方もあるのでうかつに襲えない。そんなこんなで入学式を迎へ、高校生になつた俺たち。

高校生になつた俺と境と前澤と阿部は田仲の性別を知る」ことができるのか？

そんな変態たちの口算。

## お引越しーのー

「ようやく完成したんだ……」「

「そう、信じられないわ……」「

「俺、もう我慢できないんだけど」「

「これから、もの凄く楽しみ……」「

「クしゅんっ」

俺、前澤、境、阿部、田仲の順に思いの丈を口にしていく。最後のは確実にくしゃみだけど、みんなで深呼吸……。

一瞬の静寂。

「俺たちだけの家が……」「

「俺たちだけの家があ……」「

「あたしたちだけの家が……」「

「私たちだけの家が……」「

それについて

「クしゅんっ」

俺は確実にベリー良い笑顔をしていろははず。境もベリー良い笑顔を、前澤も、阿部も、田仲は『微笑の上』くらいだけど、こんな笑顔は滅多に見せない。いつもは『微笑の下』くらいだから。

「表札は志<sup>したの</sup>多野、お前が掲げろよ

境から五人の名前が刻まれた札を渡される。

「あつたりまえだあ！」「

踊るような足取りで表札を掲げた。

そして

「五つの魂、今ここに移住す！」「

一言、俺は田の前の豪快に堂々と建つ『超豪邸』へもの申す。

「入るときはみんなでね」

阿部の言葉に俺を含めみんな頷き、境から俺、田中、前澤、阿部の順に一メートルほどの鉄柵の扉を両手で握る。

## —準備才—ケ—?

俺は阿部を見る

二二二

「一〇九

そして田中。

「クしゅんつ」

最後に壇

「来い！」

世界の果てまで、さあ行くぞ！」

ガン。

鉄扉を開けるのは軽かつた。

き」と五人の力があるから。

- 10 -

前澤の合図で五人、手をつなぐ。俺の左手には境、右手には田仲。

境の馬鹿だべエエだ玉だ熱い生れでいる語。

「まじめのいいつぽ!!

田仲は言つたが分からぬが

田代に語りかた分からぬかと、一縦に一字一句、同じことを言い、新しい我が家の敷地へと足を踏み入れた。

「……境お前！ 我が家の第一声をよくも！」

怒っているのになぜか俺は片手でガツツポーズをしている。

「入る前に目えつぶるの忘れとつたああああ！」

「あああああああああああああ！」

俺は膝から崩れ落ちて地面に手を着く。

「ふ、ふはははは！ やつたぞ！ 我が家の砂を最初に触つたぞ。」

「なんと云つ不覚！　志多野に先を超されるとは！　くそつ」

今度は境が崩れ落ち立場が入れ替わる。

「ハガなことやこでないで中に入るわよ」前澤が俺と境のやり取りを微笑ましく見ながら玄関を目指し歩き

出した。田仲が中心にあつた噴水を眺めている。

中だつ！ 俺が一番だあああ！」

「志多野待てえい！」勢いよく俺は玄関に向かって噴水の周りを走り出した。

境も負けじと走る。こうやって一人並んで走ると、中学校の体育

祭の短距離走を思い出す。

タツツツツチコ！ よしやあああ境に勝つたあ！」  
また負けたああああああ！！

俺が先にドアノブにタッチした。

「では、解禁！」

九  
子  
十  
一

「開かねえええええええ！」

やがれ！」

「そりやカギかかつてゐるからに決まつてゐるじゃない。ちなみにこれ

が我が家の力ギ」

五枚のゴールドカードをみんなが見えるようにお披露目した。

「おつ?  
それがカギ?」

いち早く俺は、カギとは思えないカギを好奇心オーラをばんばん

放出しながら見つめる。一秒遅れて境も好奇心オーラを放出してカギを見つめた。

「当たり前だけど一人ひとつ。じゃあ田仲から渡しましょうか」前澤は、後ろを無言で歩いていた田仲に渡す。田仲は「ゴールドカードを太陽にかざしながら不思議そうに見ていた。

「次に阿部」

さつきからずつとよだれを垂らし俺たちを見ていた阿部に「ゴールドカードを渡したが、なんたることかほんとにカギかもしれないカードに大量のよだれが付いた。

「阿部ええええ！ よだれを拭け！ 拭くんだ！」

俺が大声で注意した。

「はつ！？ いけない、てゆうか」の「ゴールドカードなに？ 私大金持ちにでもなったの？」

慌ててカードをハンカチで拭ぐ。どうやら前澤の話を聞いてなかつたらしい。

まあいつものこと。

「大切に使いなさいよ」

「前澤！ 誤解を招くような言い方をするんじゃない！ 阿部、これは我が家のかぎらしい。こんなカギでどうやって挿し込んで回して開けるか分からんけど」

シャツ

認証登録のため、画面に手を置いてください。

登録完了、登録名を入力してください。

認証登録完了、登録番号『零零一』田仲様。

シャツ

機械的な何かから出てきた「ゴールドカード」を取った田仲が、こちらを振り向き『微笑の下』をして小さくピース。

「うおおおおおおお！… 田仲ああああ！」

俺と境が田仲に群がる。

「第一声や砂よりもランクが高い、最初の認証登録を先超されたあ

あ！ しかもこれ声が凄い機械的だ！」

「くそつ！ 前澤！ 僕にゴールドカードを！」

「竟こ先を超されるのはもうひとかん!  
ダメだ!  
竟より先に俺

卷之三

「そこで待つてなさい。あたしたちの認証登録が完了するまで」

「ああ……」

俺は意氣消沈する。

「消沈する必要なんてないじやないか！」最後の大勝負、ラストを

「アーティストの勝負、アーティストの勝負」

勝つ！

自分で言つてて、意味が解らない。

認証登録完了、登録番号『零零一』阿部様。

丁卯

院船に出でた二ノ川

「堪えるんだ志多野」「早く認証登録して」

ノヤツ

出てきたゴールドカードを前澤が取る。

## お引越しーの2

「よし！ 前澤！ カードを！」

「それじゃ、じゃんけんして勝った方が先に」「  
「じゃんけん！ 燃えてきたぜ！」

「じゃんけんに備えて俺は準備体操をする。

「じゃんけん……今日はアイツが意氣立つてこりょうだ」  
境は自分の拳を見つめニヤついていた。

「やううか……」「……

「おう！」

一気に辺りが静まった。

風で、今はスーパーで五円で売られているビニール袋が飛んでいく。

「最初はグー！！！」

一瞬、境と目が合ひづ。

「じゃんけん……」「……

いざ、靈界の地より来たりし者よ。俺に……志多野に靈力を分け与えたまええ！

「ポン！！！」

俺は靈力が集まりやすいチョキ。集まりやすいかは自己判断。

一方の境は……

チョキ。

「なかなかだな

「あいこで……！！！」

靈力が足りないんだ！ もっと俺に、ゴーストパワーを！  
出でよー、ゴーストソオオオオウル！！

「しょーーー！」

もちろん俺はチョキ。

さて、境は……

わいつきのビール袋が風で舞い上がる。

「うああああああああああ！」

叫んだのは、境だ。

「はい、じゃあ志多野、あんたが勝ちね」

前澤から勝利の「ゴールドカードを受け取った。

境は炎で簡単に燃え尽きてしまう紙の如く、大きな平手、ぱーだつた。

「よつっしゃあああああ！」

そして、カードを挿入口に入れる。

シャツ

認証登録のため画面に手を置いてください。

「おう！」

「任せとけ」

認証登録完了、登録番号『零零四』志多野様。

シャツ

機械的な何かから戻ってきたカードを取り、確認する。わいつきまで何も書かれてなかつたが、しっかりと俺の名前と登録番号とつたらしい数字が刻まれていた。

「次、つて言つても最後だけど。境、ほんとのラストを飾れよー自分で言つただろ？」

俺は前澤から最後の一枚を受け取り、境に渡す。

「ばつかやうつ……当たり前だ！ ラストはやつぱり俺でないと…」

シャツ

認証登録のため画面に手を置いてください。

「いいだろつ」

登録完了、登録名を入力してください。

「境！ さ・か・い！ ！」

認証登録完了、登録番号『零零五』境様。

シャツ

「さて、屋内へ入りましょうか。荷物はほぼ業者にやつてもらったから、後は細かい荷物だけ片付ければいいわ」

ショツ

力チャヤ。

どうやらこの「アーロドカード」を隙間に左から右へスキャンするとカギが開くらしい。

玄関の扉が、とうとう開かれた。

新品の玄関、新品の廊下、新品の壁！ 傷一つ見当たらない。そしてこの玄関の広さ、五人みんなが一緒にいたとしても窮屈を感じない。てか広々としている！

なにより目の前に広がる廊下が長い！ ここから一番奥の部屋に通じるドアが携帯くらい小さく見える。

下見で前に見たはずなのに、言葉を失っているのか誰一人として喋らない。実際俺もだ。

「ねえねえ、まず何する？」

屋内の第一声は阿部だった。先を超されたけど今は許す。

「やつぱり俺たち恒例の思い出作り、記念ビデオ撮影じゃね！？」

俺がみんなにそれを言つと全員賛同してくれた。

俺たちはイベントのようなことがあると毎回俺のビデオカメラで思い出を記録するのだ。

「明日があたしたちの新たな出発点になる日だから、一から自分のこと話すってゆうのどう？」

うんうんと前澤の提案にみんなも答える。もううん俺も。

「じゃあ早速」

俺は田仲が背負っているショルダーバッグから大型のビデオカメラを取り出す。

「リビングでやるづ。俺が送ったソファがあるはず、そこで一人ずつ座つて録るづー」

拒否する理由などない。みんな頷いた。

リビングは廊下の一番奥にある。

遠い。

そして重い。

ビデオカメラとその脚立を持つてこの長い廊下を歩くのはかつ  
いな……。

## お引越しーの3

で、リビングに着いた。また中が凄いのなんの。

玄関よりも広い。当たり前か。

窓からの日差しで、白貴重とするリビングは砂浜をイメージさせるかのようにキレイだった。広さは学校の教室一個半と言つたところか?

「よし! ジャあ始めよ! ゼ」

境が十人は座れそうな白いソファのど真ん中に俺を座らせた。

「ビデオカメラ設置完了! 最初の同会は志多野、頼んだ。録画スタート!」

「え! ? ちょっと始まつてんの?」

うん、とみんな頷く。一人だけを録画している場合、その人以外の声は入れてはならないというのが俺たちのルール、らしい。

「げは、んん! 失礼。ではこれから【引越し無事終わつたよスペシャル、ちなみに明日俺たちが入る『新山高等学校』の入学式だぜ】を始めます」

噛んでしまつた……

「あと、これは激烈な下ネタが含まれる危険性があります。注意してください。全てノーアイクションです」

「はいカット! いいねえ。最初噛んだのいいねえ。じゃあトップバッター阿部!」

おおつと、トップから危険だ。もしかしたら一番危険……てか危険な奴は多分阿部だけだ。

阿部がソファに座ると同時に録画開始。

「名前は阿部明美<sup>あべあけみ</sup>です。永遠の一十歳だよー。この度新山高等学校、教育科に入学できましたー」

ここでみんなで拍手。

「んでー、少年と幼女大好きです! 世間でいうショタコン、ロリ

「コンかな？ でもここから重要……だつて私、腐女子ですか？」

「たいてい妄想してよだれ垂らします、多分。どんな妄想するか

は、男の子同士が「クしゅんっ！」したり」「

ナイス田仲！ 完璧なタイミングのくしゃみ！

「それで「クしゅんっ！」を「クしゅんっ！」で「クしゅっ！」みたいな妄想をしてま～す。最後に、変態は褒め言葉です！」

はあ、危険だった。毎回阿部は危険だ。阿部は何も喋らなければ男たちの虜にできるのだが……ダメだな。

「うん実に良かった。じゃあ次、前澤！」

これもまたソファに座つた直後録画スタート。

「前澤、立派な男よ。半人前のニユーハーフだけど。今はとある店で働いてるわ。どんな店か、収入はどのくらいか、聞かないほうが身のためよ」

ストレートの黒い髪が窓からの日差しによつてきらびやかに光つてゐる。

「ちなみにこの家の支払いは全てあたし持ち」

カメラのレンズを獲物を見据える猛獸のように、鋭い瞳で睨みつけて

「積極的な男は大好きよ。逆に感じやすい男も……あたしがエスコートしてあ・げ・ル」

ゾツと背筋が凍りつく感覚に襲われた。気のせいか？

「特に志多野、あんたは大歓迎よお」

気のせいではなかつたようだ……。

「余談だけど新山高等学校の接待科に入学するわ

余談にすんなああ。大事だからさ！」

前澤が立とつした瞬間に境が録画一時停止ボタンを押した。

「相変わらずだな前澤は、じゃあ次は俺だよな。前澤、録画よろし

く

境がソファの感触を味わいながら座る。

何も言わず前澤は録画開始。

「俺だ！ 境だ！ 動物だ！ 動物大好きだ！ この家に住む以上、動物をたくさん飼うぜ！ 好きな動物はワニ、ワニには思い出がたくさんあるから……」

照れくさそうに馬のよつた茶色の短髪をぱりぱりと搔く。

「あと、お父さん！ お父さんめっちゃ好き！ 何歳になつても俺はお父さんと風呂に入りたい！ 一緒に動物を観察したり育てたり釣りしたり、楽しいことしたい」

なんとも境らしい。いわゆるファザコン。猫のよつなかわいい目をして好きなものを存分に話している。

いやかわいくない、男だからな。隣で阿部はよだれを垂らしているが……

「そんで明日、新山高等学校動物飼育科に入学するぜ！ 将来はお父さんの動物園を継ぐことだ！」

力強い決意の言葉を残し、録画一時停止。

「いつもどおりだねえ」

阿部が腕を組み、しみじみ言つ。

## お引越しーの4

「次は田仲よ、志多野ようじく」

「おうよー。」

田仲の番、だけど俺も一緒に撮影する理由……それは、田仲は一人でやらせると自己紹介をしない、てゆーか喋らない。だからいつも俺がインタビューして田仲がそれに答える、という形式を執っている。

田仲を先導してソファに座らせ、俺も一緒に座る。

ソファはマシユマロより柔らかかった。

前澤が録画ボタンを押すのが見えたので、インタビュー開始だ。

「……お嬢ちゃん、お名前なんて言つの？」

「田仲……クしゅんっ」

なんか息遣いが荒くなってきた。

「飴あげるからお兄ちゃんのお家行いにつか」

うへへ。

「待て前澤カツトしろ。志多野落ち着け！」

おもいつきり境に頭を叩かれた。

「いてえなおい。何事だよ竜巻か？」

何が起きたか分からず境を見た。叩かれたことだけは分かっている。

「お前の違う人格が出てた」

「境、違うぞ。決して違う人格ではない。俺は俺だ」  
境の言葉を冷静過ぎるくらいに否定する。

「誰だお前！ 後言つておく事といえば、田仲はまだ性別が判つてない。こくらかわいくて襲いたくなつてもダメだ！ それだけを胸にしまつとけよ？」

「……こいつ……何なん？」

「くら俺がアレでも田仲は……。」

「それはね、分からんのだよミシユル君」

「ミシユル誰やねん！」

「俺の母さんの妹」

「まじかー！」

「嘘」

「嘘かよーーー！」

俺から吹つかけたけど、実にくだらん！

「いい加減始める？」「

「うつす」

前澤の一言で、境は退散していく。

「はい録画スタート」

「じゃあ名前から聞こつかな。お名前は？」

田仲の顔を見て言つ。身長が一二十センチ程違つせてもあって、田仲を見下ろすような形になつてゐる。

「田仲……クしゅんっ」

小さな口元を雲のような白さの小さい手で覆い、小さくくしゃみ。

田仲は風邪でもひいてるんじゃないかと思つてから、こつもくしゃみをする。

「趣味は？」

「植物を育てること……クしゅんっ」

静かな水のせせらぎのような声が俺の耳を癒してくれる。

田仲と出会つて四年くらい経つけど、みんな性別が判つていなかつた。趣味はかなり女の子っぽいが……。

今回は理性を保てそうだ。

「どんな植物が好き？」

「ハス……」

滅多に見せない『微笑の上』。

かわいいなあと思うが、男だったときのダメージが大きいのでその気持ちを抑える。

「じゃあ性別は？」

「クしゅんっ！」

性別はくしゃみによつて聞き出せなかつた。いくら問い合わせてもくしゃみしかないと、俺たちは知つてゐる。今はわざと聞いてみた。

「諦めよう……時期判る、多分ね。

「明日は何の日？」

「新山高等学校植物園芸科の入学式」

いつの間に付けたか分からぬ扇風機の風で、深海のように青い田仲のセミロングの髪がなびいていた。この砂浜のようなリビングによく似合つ。

「てか寒いんだが。

「こ」の家でしたいことは？」

「庭園でいろんな植物を育てたい」

田仲は微笑こよしなかつたが、期待に溢れた瞳をしていた。庭園は田仲のテリトリーになりそうだ。

「たとえば？」

「バス」

庭園の真ん中にあつた噴水で育てるのだらつか。

「ここで録画一時停止。

「田仲の性別がかなり気になるけど、最後は志多野だな」  
カメラマンが再び境に入れ代わつた。

## お引越しーの5

「はりきつていけよー志多野ー」

俺はそのままソファに座つてゐるため、すぐ録画スタート。

「俺は志多野、幽靈や肝試しが寝ることより大好きなんです！ んで幼女は幽靈よりも好きだ！」

田仲をインタビューしていたときには氣づかなかつたが、窓からの日差しが気持ちよかつた。

「新山高等学校、れいがくか靈学科に明日入学する予定。これからはこの家で肝試しを開催しようと思つてゐるからそのつもりで！」

境は録画一時停止ボタンを押す。

俺の時だけなんか早くない？ まだまだ言い足りないんだけど……。

「よし、全員の自己紹介終わつたな。よし最後に、五人みんなで録ろつぜ。前澤たちも座つて座つて」

境が前澤たちをソファへ誘導する。そして録画開始。

「おとうさあああああん！ 愛してるぜえええええ！」

まさかの大胆告白かよ！

「志多野……好きよ」

前澤、お前もか！ それこちよつと照れくさいから！

「ハアハアハアハアハア……」

阿部は興奮すんな。

「ハス…………クしゅんつ！」

ハスよりくしゃみが強調されちゃつてる！

「南無阿弥陀仏！ 南無阿弥陀仏！ 靈の幼女と幼女大好きだあー！」

まあ、こう流れがきたらそれに乗らないと。

「最後にー」この『超豪邸』に住むための捷を、志多野が言つてくれるつて！

「えつ？ まじ俺！？」

「そりやな！」

境はいつも急だ。でもそれがいい。そうじやないと境じやない。「！」の『超豪邸』に住む捷！ それは『変人か変態、およびそのどちらかである』ことだ！

この意味は、みんなに解つただろうか。

「いいね完璧……」

阿部がつぶやく。

「この捷はそれにあてはまれば住めるつてことよね。追加する人はいるのかしら」

前澤は頭が切れる。またに

「その通りだ！」

俺が言いきると、境は録画停止ボタンを押した。

「で……今から何するの～？」

まだ何も考えていなかつたことを阿部が聞いてくる。

前澤が壁に掛けられた時計を見た。

「まだ三時じゃない。自分の部屋でも見に行く？」

「行く！ ジャあみんな、解散！」

そう言つてドタドタと境はリビングから飛び出していった。

「部屋の荷物は自分で片付けなきゃダメよ。じゃあたしも部屋行くわ

「私も私も！ みんな後でねー」

前澤と阿部は田仲と俺に手を振り、リビングを後にした。

「自室行く……クしゅんっ」

ペたペたとゆっくり細い足を動かし、田仲も自室へ向かう。

もう各自室は引つ越す前から決めてあるため迷うことはない。

でも全員一階の部屋を選んだ。三階まであるのに……。

境と田仲は一階を選ぶ理由はだいたい解るけど、阿部や前澤まで一階とは……まあ俺もだけだ。

リビングに一人でいるとかなり淋しくて、無駄に広く感じた。

なので俺も自室へ行くために部屋を出た。

「元気だつたかああああああああ「ンー。それにザレスもー。」  
玄関に一番近い部屋から、境と思われる声が聞こえてくる。  
声でさえ。

後で行つてみるか……

自室へ向かうため長い廊下を歩き出す。俺の部屋は境の部屋の  
向かいにある部屋の隣だ。

玄関のすぐ隣が良かつたが、田仲にじょんけんで負けたため、  
その部屋になつた。

歩いていると、足に冷たいぬめつとした感覚がした。

「な、なんだこれ」

床を見ると透明の水みたいな液体が、すぐそこの扉の下からゆ  
っくりと流れ出でていた。

たしかこの部屋は阿部だつた気がする。

ドアノブを持ち、開ける。

「阿部、何してんだよ。廊下に水的な液体が」  
ベチャチャ

部屋の中は全面水浸しになつていた。

「ハアハアハアハアハア。し、志多野？ ごめん、止まんない」  
回転するイスに座りながら一冊の不健全な漫画を持っていた。  
その漫画で、なぜ水浸しか理解できた俺つて……。

「阿部、よだれが半端なくやばいぞ！ 汚い、拭け！ 廊下も雑巾  
で拭け！」

勢いよく扉を閉める。汚いので、早々に阿部の部屋から遠ざかつ  
た。

阿部がどうして一階を選んだか、少し解った気がした。

「はあ」

ため息を吐き、また自室に行くため歩く。

ふと視界の右に映つた、扉に掛けられた木の板が気になり、よ  
く見てみると『志多野大歓迎』と装飾されていた。

見なかつたことにしよう。

そして再び歩き出す。阿部と前澤の部屋を過ぎたのでやうやう

血室だ。

「肝試し、いっやうづか……」

俺は一人つぶやき、やつとひた血室の前に来た。

ドアノブに手を置く。

「先に境のどこ行くかな」

なぜか気が変わり境の部屋に行くことにした。

俺の部屋から境の部屋は近い。

「境に入るぞー」

九三

一瞬で背筋が凍りついた。気のせいなんてもんじゃない。本当

「三五八、五五五、一一一、一一一、

ヘビへの恐怖心と、驚愕し過ぎで体の自由が利かない。

おハ志多野ハスネリケ逃かすなよハ

太くて重いのは本で、あるあると俺の正腕まで盛つてやる。

脅威な眼と目が合つてしまつた……

アーティストとしての才能を認められ、多くの賞を受賞。また、音楽活動の傍ら、音楽教育や音楽療法などの活動も積極的に行っている。

「わわわわ境?」この腕に絡まつてゐる物体をどうすればよ?

ヘビは一別れした舌を出したり陽までたりする

え  
？  
いや、昔やがね

「スネークは、毒蛇だ」

んなに甘くない。

「俺……ここで死ぬのか！？ 死ぬのか！？ 死ぬんだな！？」

「はは 」

乾いた苦笑いを、境はした。

「死にたくねえよ！？ まだ俺したいこといっぱいあるよー？ 幽靈と会話したり、幼女と会話したり、ときに大人の階段上ったり……兎・に・角！ 死ぬのは嫌なんだよー。しかも明日から新しいストーリーが始まるんだよ！ 霊界と通信ができるようになるかも知れないんだよ！」

「そうか……残念だつたな」

境はキツネの頭を撫でながら言ひ。

「あきらめんなよー！」

「そんなに元気なら、靈界でも楽しくやれるよな」

「やれねえよ！ 死んでも未練たらたら過ぎてこの世から脱け出せ

ねえよ！ 無事に三途の川も避けねえ！！」

「良かつたじゃないか。死んでからの田標ができる」

「良かねえよー！」

「そーなのかー」

「そーなんだよー。一いちとら真剣だぞー！」

「むむ……そこまで言つなり……」

境……

「よろしくお願ひしまああす！」

「べ、べつに志多野を助けたいとかじゃなくてスネークが志多野ばっかりとくつついてるから離すだけであつて……勘違いすんなよー！」

「うん、お前いつの間にそんなキャラになつたんだよ。

「ほり行けえ！」

境がカゴからネズミを放つた。瞬く間にネズミは部屋内を走り回る。

するする……ぐん！ と音を立て、左腕でずっと俺を睨みつけていた茶色っぽい毒蛇は、床に落ちた。腕がかなり軽く感じた。

「今から弱肉強食の世界が見れるからな  
俺と境はじつと、毒蛇を見据える。そして……  
つ。

やりおつた…… まじでやりおつた。

「じめんな……」

そう言つて食事中の毒蛇へカゴを被せる。

「よし、一件落着！」

「俺の精神的体力が限界を超えたがな」

一、二回深呼吸をした。

「で、志多野は俺の部屋に何の用だ？」

鹿の大きな角をタオルで磨きながら言つ。

「宣言通りのことにして、もうなつとるし……」

よく部屋を見渡すと、十一畳の部屋の七割くらいがいろいろな動物で埋め尽くされていた。

「普通だろ？ ああつこでこ言つとくけどスネークはママシだから」

「まじで死ぬから」

「噉まれなかつたから幸いだな」

にこつと笑う境。他人事だと思いやがつて。

「まあそうだな、じゃあ部屋戻るわ」

ため息を吐き、肩を落とす。

「おー！ また後で」

境はライオンの子どもに首元を舐められながら、俺を見て言つた。ドアを閉め、たいして運動もしていらないのに疲れた体を、早くベッドで休めたいと思い、早足で部屋に行つた。

「はあああ

ベッドへダーティップ。ふかふかで気持ちいいな。このまま寝たいな。でもベッドと机と、数十個のダンボールがあるだけのだだつ広い部屋で寝るのは無理だな。

幽靈が集まつやすい部屋にしなくては！

「よしつ」

寝たい気持ちを強引に引っ込め、早速部屋の片付けをする。

ベッドから一番近いダンボールを開ける。中は肝試しに使う道具類が入つていた。

これはまだ必要ないので次のダンボールへ。

今度はお目当ての物が入つていた。

まず、青と白の縞模様のカーテン。

そして数十本もの木製の卒塔婆。それには俺が適当に書いた文字が書かれている。『靈よ來い！』とか『冥界の入り口』とか。

そしてこれを部屋に無造作に立て掛けた。

あとはベビのようなくぐにゃの、昔風の文字がびっしり書かれた古びた紙を壁一面に貼り付ける。幼稚園の頃から部屋に飾つていたが、いまだになんて書いてあるか解らなかつた。

## お弔越しーの「

「志多野一、今日の晩飯な……つておー、また卒塔婆かよ。それにその意味不明な文字の紙」

そんなとき、境がやつて來た。すごい呆れ顔だ。

「この良さが解らないなんて、まだまだだね。」

「これがないと落ち着いて寝れねえんだよ」

「これがあると落ち着いて寝れねえんだよ」

境は俺と全く同じ口調で、全く真逆なことを言つ。

「そんなはずない！ これがあるから毎日気持ちよく安らかに穏やかに眠れるんだぞ！ きっと安らかに眠れることができる靈でも俺に添い寝してくれてるからかな」

俺はそうだと嬉しいなあ、と思いながら期待に胸を膨らませる。

あんまり認めたくないけど、俺は靈感ゼロだ。

「結構その光景を想像すると怖いんだけど……」

実際に俺もその光景を想像してみる。

……実に夢のような時間じゃないか！ 少しテンションが上がつてきた。

「おー、もし靈が添い寝してたとして、その靈がオッサンや熟女だつたらビールなんだよ」

ジた―――。

わつきのベビの時とは違う寒気がする。

「やめろー、せめて女子中学生……いや！ 女子小学生にしてくれ！」

「普通に『幼女』って言やあいいだろ」

「幼女だ！」

「おせえよ！ ちなみにその幼女の服装は？」

「もちのろん白装束！」

「その幼女は生きてる？」

「生きてる！」

「靈関係なくなつたぞ」

「じゃあ死んでる！」

「かわいそうに……てかなんだ、この言い合いで」

「兎に角俺は、幽靈の幼女といつせ……」

「ストオオツプ！」

境が腕を伸ばし手首を曲げ、ストップポーズをする。

「分かつたから、今日の晩飯の話だ！」

「米と塩か？ それに水と花……あとはその人が好きだった食べ物を」

「墓参りじゃねえよ！」

「なんでだらう、境が息切れしている。顔も赤い。」

「俺のツツコミスキルを上げて何がしたいんだよ志多野は」

「世界を滅ぼそうとしている魔王討伐？」

「俺に聞くな！ ツツコミじゃ魔王討伐できねえだろー。」

「何を言つー ツツコミは千のダメージを与えることができるぞ」

「つええなおー！ いやだからそういうじゃなくてー！ 早くしねえと前澤が次のストーリーに進めないんだって」

「ちなみに次のストーリーどんなん？」

「ああ？ それは志多野が言つた通りの料理を作るための材料の買出し……つてだ・か・ら！」

「そーゆつことかよ。それならそつと早く言えばいいのになあ。まあ、前澤の手料理は美味しいから何でもいいんだけど、とりあえずガム

ム

「いくら前澤でも作れる物と作れない物がある。それに晩飯にガムはいやだ」

「そつか……そう来るなら、俺は容赦しない」

すぐ近くにあつた卒塔婆を一本、俺は両手で持ち、剣のよう構える。

「悪いが、そう長くは相手にできないぞ？」

「やつきながら境も近くにあつた卒塔婆を持ち、構えた。

ひゅ―――――。

俺の脳内で勝手に風を吹かせる。

「いざ！」

「いざ！」

境が俺の言葉を追いかけるよつて言つ。

「己の信念を貫き通すために…」

「我が信念を貫き通すために…」

二人の信念が、ぶつかり合あつとしている。

「参る…」

「参る…」

最後は一人の言葉が重なつた。

力強く床を蹴り、全速全身。そして卒塔婆を振りかざす。境も

同様だつた。

風を裂くよつて振り下ろす。

「安心しな、みねうちだ」

俺は　見事に風のみを切り裂いて、境に腹を切り裂かれた。いやまあ、血とか出でないけど。そしてその場に倒れた。

てゆーか卒塔婆に峰も刃もねえからな！

「諦めてちゃんと考えろ！　志多野の道はそれだけだ」  
どうやらその道しかないらしい。

嫌だなあ。

「仕方ない……そーだなー、今日は質素に海苔と醤油とたくあんと米でいいんじやないか？」

萌えもクソもない普通の立ち方をしてから言つた。てか萌えとクソがある立ち方って何なんだ？　気になる……

「おお？　これまた質素だな。なんで質素なんだよ？」

「質素だからだ」

「意味わからんねえから」

意味が解らないらしく。

よし、そんな境のために俺が説明してやるつ。

「質素とは、身なりや暮らししづりなどに無駄な金を……」

「ストップー！」

境が先ほどと同様にストップ合図をする。

「誰が質素の意味を説明しようと言つたんだよ。それに何気に詳しい

し

「で、ライスター、海苔と醤油と時々たくあん……」

「おかずどこいつたんだよ！　ホウエアーアイズおかず！？」

「ツツコミが早いぞ境。まだサブタイトルを言つていないー」

「まじかじめん。じやあサブタイトルどうぞ」

申し訳ないようこ、境がどうぞと手を差し出す。

「海苔と醤油と時々たくあん、えつ？　俺のおかずはビックル？」

「……ほんと、おかずどこだよーー！」

「それは映画を見てからのお楽しみだよ境」

「これ映画化すんの？」

「しないけども」

「じゃあ言ひなー！」

「境いいいい！」

突然、乱暴にドアを開けて前澤がやつて來た。そのせいで境が腰を抜かしてしまった。

一瞬で空気が変わった。

「あんたいつまで待たせれば気が済むんだ！ 早くしねえと店閉まつちまうだろうがよ！」「

怒り狂っているせいでの前澤が混じつてしまつていた。なんというか……前澤はどつちかに分けたほうがやつぱりいいな。混じつていると凄まじく気持ち悪かった。

「いや、それはその……すいませんでした」

境が土下座して謝った。

「まあいいわ。今日の夜は寝かせないから、覚悟しきなさい」  
あーーかわいそうに。前澤と一線を超えないのが……  
やばい吐き気が。

今にでも境は失神しそうだった。

そんなに嫌なんだな。当たり前だけど。

「で、今日の晩ご飯は？」

「海苔と醤油と時々たくあん、えつ？ 僕のおかずはビックく？」  
俺はすかさず答える。

「分かったわ」

「分かったの！？」

境が大声を上げている。

「当然よ。志多野の言ひことは全部理解できるわ

うーん、嬉しいような……嬉しいような……微妙なところだ。

「じゃあ買い物行ってくる。留守番頼んだわよ」

小さく一回だけ手を振り、前澤は出て行つた。

「俺……晩飯まで考え方してくる……」「

しょぼくれた顔をして境も部屋から出て行った。

考え方といつのは聞かなくて分かった。俺だつてその立場な

らぬむ。

「さて！ 俺は晩飯まで寝るかな」

ベッドに入り、気持ちよく眠りに落ちていった。

「てめえ起きやがれ！」

別世界から境の声が聞こえてきた気がした。

「起きろつつてんだよ！」

「う……うへん？ 空襲か？」

何だ急に。こちどら眠いんだ起こすなよ。

「こんな時代に空襲なんてあるわけねえだろー。早く起きろ」

「あと五時間……」

「あと五分より質悪いぞ。まあいで起きろー。」

起きろと言われて素直に起きるわけない。眠いかり。

「まあいいや。引きずり持つてくからよろしく」

境はそう言うと布団を剥がそうとした。しかし布団はしっかり俺が握っているので剥がれはしない。

「いちいち抵抗すんな！」

境が無理やり布団を引っ張つたので俺ごと床に落ち、背中を強打した。

「いてえ……」

「よし、行くぞ」

そのままリビングまでほんとに引きずつて行く。

リビングに入ると味噌汁のいい香りが……しなかった。

境だけの力ではどうにもならなかつた俺の布団を、三人の勇敢な戦士が加わったことにより剥がされてしまった。

「じゃあ食おうぜ！ 質素過ぎる飯を！」

俺は介護されているかのよつこ、イスに座らされる。眠い。

「では、いただきますー！」

「いただきますー！」

前澤の言葉にみんな続いた、俺を除いて。田仲は分からんナビ。

「おやすみなさい」

「そして寝る！」

「おまつー！寝んなよー。」

だが断る！

「もう寝かしとけばいいんじやない？」

阿部、ナイスだ。よくぞ言つてくれた。

「うんまあ、そーだな」

これが俺たちの、最初の食卓だった。

## 俺の正義！

「ちょい、あそこ」

俺は隣で歩く境の肩を叩き言った。

「ああ？ そーゆうのは阿部か田仲に言つてくれ

「阿部！ 田仲！ あそこ」

反対の歩道に、俺のジャステイスが歩いている。

「大丈夫、私たちも気づいてるから」

「そうか。それにしてもいいな！」

あれこそ神がこの世に最後に残した希望なんだろうな。  
志多野、あんまあつちばつか見ると不審に思われるぞ

「大丈夫だ。手は出してない」

「いや、そーゆうことじやなくて」

最近は不審者が多発しているからな、集団で登校している。俺たちのことではなく、反対の歩道で歩いているあの子たちのことだ。  
男共はどうでもいい。

三人並んで歩いている真ん中の子

かわいい！

あのポニー・テールはその子の母親が結つたものなのか？

もしそーだつたら羨ましきるだろ！ 俺と代わってくれよ！  
それでピンク色のランドセル背負つて…………〃〃ニースカート

……だと？

「ガードレールの白いのが付いてるわよ

「大丈夫だ」

「でもだいぶ白いわよ、そこの部分だけ白無地みたいに」

「大丈夫だ」

実際俺はほとんど前澤の話を聞いていなかつた。目線はずつとあのポニーの子に向けられている。

幼女が二ーソを履くとなぜあんなに可憐に見えるのだろう。

「てかれ、前澤」

「なに境」

あの細いスラッシュした足触つてみてえ。

「お前なんで女の制服着てんの？」

「なんでって、仕事場じゃいつも着てるわよ。どこか変？」

絶え間なく笑うあの子の横顔が、天使そのものだった。

「いや、男が着てるとは思えないほど似合つてるけども。男だろ……学ラン着ろよ」

「いいじやん！ 前澤めちゃくちゃかわいいじやん！」

あの子たち右に曲がっちゃったじやねえか！

……後姿もかわいいな。

「女である阿部がそれ言つたりや終わりな気がするんだが。そしてもう一つ、田仲はなんで学ランなの？ 男なの？」

ちょうど横断歩道がある！ でもまだ赤か……

「着たかつたから。クしゅん！」

おっ、青になつたぜ。

「やうなのか…………てか志多野も少しほは会話に加われ…………つて……おめえどこ行く気だ！ そつつけ学校じやねえぞ！」

「こっちだつて学校だ！」

右に曲がり横断歩道を渡りひといする俺の左腕を、境の子どものよ  
うな手に掴まれた。

「学校つて、小学校じやねえか！ 僕ら行くの高校だぞ！」

境の手を振りほどこうとする、が…………なかなかの握力だ。  
伊達に動物飼つてないな。

「離してくれ。俺には行かなきやならない所があるんだ！」

「それが高校だよ！」

「あーもう赤になつちゃつたじやねえか！ てかこの信号変わるので  
はやつ！」「

「俺らはこいつちだ。入学式に遅刻とかせつてえー嫌だからなー」

「あああ…………あの子、かわいかつたな…………」

「そりと俺は咳き、境に左腕を掴まれたまま真っ直ぐ横断歩道を渡つた。というより引きつられた。

「てか横断歩道渡つてすぐのところに正門あるのに右行こうとすんな

「そりは言つてもだな、俺は高校より小学校のほうが良いこと思つただ」

「小学校のほうが良くとも俺らは今日から高校生だ。ほらー。」

にだつて幼女、っぽいのはこりる！

境は田仲を指差す。

「……………そだつたな。すまん境！ 田仲ー」

俺は境と田仲に深く腰を折り謝つた。急に謝られた田仲はひょつと顔に困惑の色を出していた。

「正門の前で何やつてるのよ。恥ずかしいにも程があるわ」

呆れ顔で俺たちを見て前澤は言つ。

よく辺りを見てみると俺たちと同じ入学生らがこつちを見て笑つていた。

「とにかく行くわよ

そんなの、俺と境が気にするはずがない！

そして羅生門みたいな正門を通つた。

## 運命は一つとは限らない

あれから俺たちは人波に流されて入学式が行われる講堂へとたどり着いたのだった。

「おい、これは……」

「ありえんて！」

俺と境は呆れて いや、驚嘆していた。

呆れているのは前澤のほうだ。

「この広さなんだよ！ アメリカの牧場並に広いぞ！」

「いや、それは言い過ぎだつて！ でもそんくらいありそつだな！」

講堂の広さが異常過ぎる！

なんだこれ！ 俺ん家とは比べ物にならん！

「席自由だけど、どこ座る？」

前澤はなんでそんな冷静でいられるんだ！

「一番前行こうぜ！ 一番前！」

境が人の迷惑など気にせず一番前の席へ走っていく。

その後を俺は、迷惑を掛けた人たちに軽く謝りながら境に着いて行つた。

「おせえぞ志多野！」

丁度一番前の席は空いていたようだ、境は先に座つて俺に手を振つてている。

「お前が早いんだよ！ 謝るのに苦労したぜ……」

後半は独り言のように咳き、境の隣に座つた。

「もう急に走らないで。それに一番前つて……」

まるで母親のように前澤は俺たちを叱る。

「私はどこでもいいよ。ただし！ 境が志多野の隣ねできれば阿部、俺の隣に…………ダメだ！」

よだれが俺に付く可能性があるしな。  
となると

「志多野の隣はあたしよ」

ですよねーー。

よだれが付くか、痴漢的行為を受けるか。

俺の運命は『邪』

ケシケン

少し強めにくしゃみをしながら、田仲は俺の隣に座つた。

田仲ああああああああああああああああああ

あまりの嬉しいは俺は  
幼女のよにたまへきの田所は抱き着いて  
いた。

濃い青の肩よりちょっと長い髪からは、女の子特有の香りがして、理性が狂いそうになつたので、田仲から離れる。

しかし、弓は阿部と前澤が嬉しいな

「なかなかやるわね…………今日は譲つてあげるわ」

悔しそうな顔で、涙を堪えるようじながら田舎の隣へ前澤は座つた。

そんなに俺の隣に座りたかつたのか……なんかすまんな……。  
でもなぜ田仲は、俺の隣に自分から座つたのだろうか？

## バカとバカはバカだ

入学式が始まって、何時間経つたのだろう。

空席だった俺たちの周りも満席になつて、ただならぬ雰囲気を醸し出している。

今年の新入生は六百三十一人だと、校長の長つたらしげ話の中で言われた。

「では続きまして、生徒会長から新入生へ祝福の言葉を頂きます」

「どうせこれも長いんだろ。

この手の話は長いくせに面白みがないからなー。

しかも女か……。もう顔から礼儀正しさが伝わってくるぜ。

「新入生の皆さん、おはようー！」ぞいります！

・・・

明るく元気に、且つ丁寧に生徒会長は挨拶をした。

挨拶をするのは極々普通のことだ。が、この間は何だろう。なぜ、話を進めないのであつ。

まさかこんな重い空気の中、この生徒会長は俺たちに『おはようございます』を求めているのか？

みんな言う気配ゼロだな……。なんか生徒会長がかわいそうだ。そんな状況なのに生徒会長は笑顔を保つていて。いい加減話進めてくれ……。

心が痛む。

「おはよーーー！」ぞいまああああああす！

突然、重力よりも重いこの空気と静寂を破つたのは、左隣にいる境だつた。

おまけに席を立つていて。

境…………お前は一人で走りすぎだ。

俺だつて一緒に走つてやるよ！

「おはよーーー！」ぞいまあああああす！

俺も席を立ち、隣の境に笑いかける。

境もそれに応え、そして俺たちは羞恥の半端ない重さによつて席に着いたのだった。

ただ生徒会長がこちらに向けてくれた微笑みだけが救いだった。しかし俺と境は入学式が終わるまで、ずっと俯いていた。

## 変態と混浴など却下！

入学式が終わってから、境と俺に話しかけてくる人が殺到していた。

俺の顔は（前澤と阿部が言つには）悪いほうじゃない（良くもない）し、境だって小学生みたいな外見で至つて普通だ。

いや、高校生にもなつてまだ小学生の趣おもむきがあるのはちょっと異常か。背も低いし。

そんな俺たちに話しかけてくる理由はもちろん、入学式中の、あの羞恥心の何物でもない、挨拶だ。

今思つとなぜあんなことをしてしまつたのだろう……。自分の言動に深く反省する。

「ああ。全く、境のせいで精神的に疲れた」

ようやく話しかけてくる人も少なくなり始めた頃、俺は肩を落とし境に愚痴をこぼしていた。

「しょーがねえだろ！ あまりにも生徒会長がかわいそuddtandだよ！」

大声で喋るな恥ずかしいだろ。  
かわいそuddtandたけども。

「もう帰ろうぜー。前澤、帰つたら風呂入れてくれ」

俺は棒読みで前澤に言い、とぼとぼ正門に向かつて歩き出す。

「分かつたわ。そのかわりあたしと入るのよ」  
その後に前澤たちも続く。

「よし、境も一緒にに入るぞ」

前澤と一人だけで風呂に入るわけにはいかない。  
「げつ、まじで」

露骨に嫌そうな顔を見せる境。

「男だけのお風呂！？ 私も入る！」

阿部が片手を上げながらジャンプを繰り返す。

ジャンプのせいで特別な口しかやらない後ろに束ねたお口様の  
ようなオレンジ色の馬の尻尾が上下にゆつさゆつさ揺れ、制服のス  
カートがひらひらしてパンツが見えそうになる。

周りにいた男が過剰に反応して阿部（主に下半身）を見ていた。  
阿部はパンツなど見られても気にしないタイプだ。

今の発言が、それを納得させられる。男だけの風呂に自分も入  
るうとするなんて、こいつ何者だよ。腐女子だけど。

「ダメだ」

「ダメだな」

「ダメだわ」

阿部は男一人と女モドキ一人に拒否され、ふくれつ面をする。

湯船をよだれ船にされるわけにはいかない。

## 変態と混浴なんて不本意だ！

「えへ。じゃあもういいよーだ！私はたなかと入るからー…」  
と、聞き捨てならんことを言いながら阿部は後ろから田仲を抱く。

くそお、俺も抱きてえよー。いろんな意味で。

じゃなくて、阿部と田仲が一緒に風呂だと？

そんなん世界が認めて俺は認めんぞ。どうやらそれは俺だけではなく、境と女モドキも同じ考えだった。

しかし今まで性別を隠してきた田仲がこんな易々と性別が判つてしまつような、一緒に風呂に入るなんて行為をするとは思えない。

「まじで？」

俺と前澤の代弁者は境だつた。

「まじだよ！ねーたなか

田仲は物凄く歩きづらそうになつていて、表情は笑つていて、うに見えた。

まさか！一緒に入ることを喜んでいるのか！？

「クしゅんつ」

清楚な左手で口元を軽く抑える田仲は、彼女（彼）の幼さを引き立てていた。

俺はいつの間にか田仲に見とれていたことに気づき、反射的に反対側に顔を向けると、たくましい女性のよつな左手で、口元を抑えてくしゃみをする前澤がいた。

そのくしゃみには全く幼さは感じ取れなかつた。

「今の田仲のくしゃみは『イエス』という意味なのか？」

境は恐るおそる田仲に聞いた。

俺は田仲のくしゃみの意味より前澤のくしゃみの意味の方が知りたいんだが……。

めつちやウインクしていく。

俺は完全無視を続けると、前澤らしくないしょんぼりとした顔

をするので、無性に申し訳ない気持ちになった。

「そおだよねえーたなかあ」

未だに田仲の後ろに張り付いている阿部の確かめるような口調に、

田仲は微笑の上ではつきりと頷いた。

。

「まじで…！」

「まじで…！」

「まじで…！」

男一「一人、いや男二人は驚きを隠せないでいた。さすがの前澤も男が出ててしまつている。

それほど衝撃的だつた。

まさか本当に一緒にに入る気だつたとは……。

「うなつてくると田仲は女という線が高くなるぞ。

次の俺の一言で、決着を着けてやる！

「じょうがない阿部、特別に俺たちと一緒に風呂入ろうぜ」  
傍から聞けばこれはただのセクハラにしかならないだろうな。

阿部なら絶対この話に食い付く！ そして阿部が俺たちと一緒に入ることで田仲が『一人で入る』なんてことを言えれば、もうほとんど田仲の性別は女だと思つていい。

「ほんと…？ 入る入るうー！」

阿部はやつと田仲から離れ、俺たちに満面の笑みをした。

やつより大きくジャンプすんな。パンツ見えとるから。遠田でこつち見とる男子いるから。

喜びが隠せないのかずつとジャンプをしている。

変人も共に・・・

そんなことより、さあ田仲、どう来る？

一人で入るのか？ 僕らと入るのか？

「…………」

何も言わない！？

ということは俺らと入るということか？

「たなかも一緒にに入るよね？」

阿部ナイス！ よくぞ肝心なことを造作もなく聞いてくれた！

「うん…………！」

微笑の上…………いや、この笑顔は今まで見たことがない。

まだ乳歯じゃないかと思つてしまつほど白い歯をかすかに見せ、  
子どものような、無邪氣な笑顔をした…………。

「…………」

意識が放浪とする中、俺は細い『汗』を流していた。

「お前何泣いてんだよ！」

俺は今、境から背中を叩かれたのだろうか…………？

しかしそんなことは眼中にない俺は、おぼつかない足取りで田仲に近寄った。

視界はぼぼぼやけていたが、しっかりと強く、目の前の『幼い女の子』を、抱いた。

「俺の…………娘になつてくれ…………」

心の奥底から出た切実な、正真正銘の願いだった。

「娘かよ！」

「境 ダメよ」

そういえば田仲を抱くのは今日一回田だつたな。

あの時には感じ取れなつた、温もり、鼓動。そして田仲の身長  
がいかに低いか。

もつと抱いていたかったが、なぜか俺は田仲を離した。  
いつもの俺なら永遠と抱いていたことだろう。

しかし今はそういう気分、いや気持ちじゃなかった。

俺は『汗』を手で拭つて、

「娘だよ！」

境へ突っ込んだ。

## 変態は治らないもの

その後セクハラだの口リコンだの誘拐犯だの、周りにいた新入生たちに散々言われたが、今の俺はそんなことビリビリもよかつた。

田仲の最高の笑顔を見れたのだから！

それから徒歩四分の家に着くまでの間、俺は気持ち悪いほど一心ついでいた。

「たつだいま～！ お風呂お風呂ー！」

阿部は靴を脱ぎ捨て、自室へドタドタと走っていく。

「ただいま帰つたぜ！ 早くエサやらんといかんな！」

境は阿部の分も靴を揃えてエサをやりに自室へ行く。

「ただいま。早速お風呂の準備しなきや……」

前澤も靴を揃え、自室にカバンを置きに行く。

「……ただいま。クしゅんっ」

田仲の靴小さいな……。

十九センチ！？ ほんとに高校生だよな？

「ただいまー。俺風呂まですることねえな……」

みんなやることあつていいな！

リビングにいたら絶対前澤に風呂の準備を手伝わされるので、特にすることはないが風呂まで部屋にこもることにした。

「はあ。今日はほんとに疲れたわ」

俺は肩からため息をし、カバンをその辺に放り投げ、ベッドへ横たわる。

あの笑顔、またしてくれないかな……。

ベッドの上に読み散らかした分厚いアルバムの中から一冊を取り開く。

そこには俺が今まで趣味で撮っていた写真がびっしりとある。

このアルバムは公園で撮った写真しか貼っていない。  
まず、一枚目。

明るく元気に友達たちと鬼ごっこをしてる幼女（小学二年生）。

一枚目。

転んでしまって大泣きしている幼女（小学一年生）。もちろん撮った後に手当をして慰めてあげた。

三枚目。

ピンクのスカートでブランコを勢いよく漕いでいる幼女（小学四年生）。ギリギリでパンツが見えなかつたのが俺の感情をたらなくヒートアップさせた。

こんな感じで最初から最後まで全てのページには幼女の写真がある。

公園シリーズだけでなく、街中、海、プール、山といった様々なシリーズのアルバムもある。

これは決して盗撮ではない。ちゃんと親御さんの許可を得て、撮っているのだ。

しかし娘がいる家庭だけ撮っているのはかなり怪しまれる。なのでスーパー・ウルトラグレート超不本意ではあるが、息子がいる家庭もちゃんと撮っている。

少年の写真は全て阿部にあげていた。

そして、皆は俺のことをこう呼ぶ。

ロリコンだ。ペドだ。

ペドじゃねえよ！

## 風呂は裸？ それとも水着？

風呂の準備ができ、更衣室へ行つて風呂の様子を見るとみんなのテンションが上がる。

主に風呂のでかさに対してだが。

「何これ！ 風呂じゃなくね！？ 温泉じゃん！」

「五人入つても余裕で泳げる広さだな！」

俺と境は風呂、いや温泉を見て落ち着きを保つなんて不可能だった。

といつても湯が湧き出でているわけではないので、本物の温泉ではない。

「よし志多野！ 早速水泳で勝負だ！」

「当たり前だ！」

「二人ともちゃんと着替えなさい。制服のまま入らないでよ  
俺の母さんみたいなこと言つなよ……。

まあ、たしかに制服のまま風呂入るのはおかしいか。  
でも着替えるつてどういうことだ？ 風呂は裸だろ普通。  
着替えるつてなんだよ。風呂は裸で入るもんじゃねえのか？  
境も俺と同じ考えだつたようだ。

「水着よ。志多野とあたしだけだつたらいいけど、阿部と田仲がいるじゃない」

田仲は性別不明だから何とも言えんが、阿部がいるからか……あれでも一応女だもんな一応。

「私は全然いいよ。むしろ裸の方が！」

「部屋から水着持つてこようぜ志多野」

「だな。行くぞ」

阿部の言葉をかき消すように俺たちはわざとうつへ大きい声でそう言った。

「くそ！ 部屋まで遠い！」

「玄関に一番近い部屋なんて選んだの誰だよ…」

「お前だわ！」

長い廊下を一人で愚痴りながら走る。

ようやく自室にたどり着き、夏物と書かれたダンボールを開く。

「水着あつたかー？」

「大丈夫だ。よし！」

水着とゴーグルを持つて、また長い廊下を走った。

「みんなもう入ってんじやん」

「はええな……でもこれは運がいいぞ」

脱ぎ散らかされた制服やキレイにたたまれた制服が置いてあるだけだ。

もしかしたらこれで田仲の性別が判るかもしね。結局田仲も一緒に入ることになったことで、また振り出しに戻ってしまったからな。

「ああ、運がいい。スーパーウルトラグレート超不本意だけど」  
どこかで聞いたことのあるフレーズだなそれ。

境も気付いているなら話は早い。

## 負けたら夜這い！

「じゃあゲームだ。上から一つずつ衣服をどかしていく。それでどかした時に『物』があつたらアウト。罰ゲームはそつだな……前澤の部屋に夜這いに行くのはどうだ?」「いいだろ。俺からでいいか?」「いいぜ」

そして俺は一番上にあつた学生服（上）をどかす。

「俺か……セーフだ。

「俺か……境は学生服（下）をどかす。

セーフ。

「ここからだよな問題は……」

俺は白いタートルネックをどかす。

「俺か……セーフだ」

心拍数が緊張とちょっととした罪悪感でかなり早かった。

「やばいな」

「どこがだよ。次靴下だからその下にあるシャツ見えてんじゃねえか。ずりいよ」

余裕で境は靴下をどかす。

当たり前だがセーフ。

「ここからが正念場だ……。

今さら後には引けん。

「どかすぞ?」

「ああ」

一呼吸し、俺は真っ白いシャツをどかした。

「はつ?」

「はつ?」

俺と境はシャツの下にあつた物を見て、一瞬思考が止まった。

「……ビーする」

「俺に聞くな…………」

どの角度から見てもこれは、ピンク無地のボクサーパンツだよな……？

田仲は男なのか？

どう見てもこれは男物にしか見えない。

女でもボクサーパンツ履くかもしだれんしな……。そんなの聞いたことないけど。

「覗ゲームはちゃんとやれよ。『物』が出てきたからな。とりあえず風呂入ろうぜ」

お前ちやつかりどうだろ。今の俺の精神状態にさらに追い討ちを

かけやがった。

「まじかよ…………」

まあ、今は考えても仕方ないか！（現実逃避）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9930z/>

---

変態の日常的生活

2012年1月5日22時54分発行